

新技術を活用した効率的畜産経営の確立に関する調査研究

～高付加価値畜産物生産技術体系の経営的評価

池田純子、岩崎浩之¹⁾、田澤倫子、磯健司

1) 現 畜産振興課

現在、世界的な穀物価格の高騰や米の需要・食糧自給率の伸び悩み、更には、水田の有効活用を推進する国の施策などを背景に、飼料用米の作付が急速に拡大している状況にある。一方、県内家畜飼養者の飼料用米の家畜への利用に対する考え方や取組状況、さらには、消費者の飼料用米給与に対する意向等については、あまり分かっていない。そこで、飼料用米の今後の展望と定着を図るための方策を探るため、県内養豚農家における飼料用米の利用状況や考え方、消費者における飼料用米給与に対する意向を調査した。結果は以下のとおり。

(1) 飼料用米を利用している県内養豚農家はわずか1割であったが、6割の養豚農家が飼料用米利用に関心があり、使う際の条件として価格の低下を挙げた。

(2) 大多数の消費者が飼料用米給与に好意的であり、なかでも比較的若い世代(30歳代以下)の比率が高いことが分かった。

(3) 飼料用米を利用していない理由は、「給与に手間がかかる」を挙げた農家が多く、「安全性に疑問がある」や「イメージが悪い」を回答した農家はいなかった。

以上のことから、飼料用米利用の定着を図るためには、生産コストの削減、流通コストの削減、給与法等の改善によるコストの削減が必須である。さらには、比較的若い世代をターゲットにしての国産飼料用米給与豚であるという付加価値を付けた販売も有効であると考えられる。

また、省力効率的な給与法も含めた飼料用米給与技術が確立されれば、飼料用米利用の定着化が進むと考えられる。

スーパーカウ受精卵の効率的利用に関する調査研究

星一美、宍戸容子¹⁾、斎藤栄²⁾、飛田府宣³⁾

1) 現 農業大学校、2) 現 畜産振興課、3) 現 県央家畜保健衛生所

本県では、県内酪農家の経営安定を目的とした乳用牛改良のために、平成5、6年及び平成13、14年に乳量・乳質について高い遺伝的能力を有する乳用牛計17頭を北米から導入し、導入牛及びその娘牛(スーパーカウ)から採取した受精卵を県内酪農家に配付する「高能力乳用牛受精卵配付事業」を行っている。そこで、上記事業により酪農家で生産されたスーパーカウ系統牛が生産性向上にどう貢献しているのかを調査分析するため、各酪農家に配付した受精卵の移植状況、生乳生産状況等について調査した。調査方法は配付受精卵の移植状況、受胎状況及び受胎牛の分娩状況を調査し、さらに生産された雌産子については、分娩後に牛群検定データから泌乳成績の分析を行った。結果は、以下のとおりであった。

(1) 配付受精卵の移植状況及び娘牛の生産状況は、平成6年度から21年度までの16年間で1,131個の胚を配付し、平成22年3月現在、313頭の産子が生産され、そのうち娘牛は149頭(47.6%)で、受胎率は35.8%であった。

(2) 配付胚より生産された娘牛と当該飼養農家牛群の検定成績を比較したところ、305日補正乳量では、娘牛(92頭)10,828kg、飼養農家牛群(延べ92戸)8,964kgと娘牛が高い泌乳成績を示した。乳成分では、平均乳脂率、平均蛋白質率、平均無固形分率に差は見られなかった。

以上より、「高能力乳用牛受精卵配付事業」で生産されたスーパーカウ系統牛は、当該飼養農家の生産性向上に貢献していることが明らかとなり、遺伝的能力の高い牛の受精卵を活用することで、酪農経営の安定が図れる可能性が示唆された。